

第 1 1 回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

端然として 高津 秀俊（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

本当の地元の作家による地元の山、岩殿山からの作品である。岩殿山からの作品が過去10回のコンテスト中、最優秀賞として選出されたことはなく、初めての受賞である。明け初めた時間帯、2度にわたるチャンス、これは2回目のものであろう。手前杓子山にあたる光と、富士山本体にあたる光、ことに富士山本体にあたる光は八合目近くまでを照らしているが、この光のため、テーマが浮き彫りとなった。全体の構成としても、下部の陰翳、中間部の光と半調によって富士山の美しさを際立たせている。

これがわが大月、岩殿山からの富士かと、幼時から見慣れた選者としても瞠目に値する秀作である。

推薦

山霧流れる 伊藤 茂（静岡県駿東郡） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

これまたみごとな作品である。大蔵高丸からと記しているが、これはその範囲中であっても白谷ノ丸と思われる。大蔵高丸の山稜の山ひだを埋める朝霧、中間部の二筋の雲、その上に朝陽を浴びて高くそびえる富士山が実に美しく、崇高とさえ思える出来栄である。最優秀賞のような強さはないが、優美かつ高度の作品として比類ないといえる。3番山頂として最も多くの作品が寄せられた中でも、断然他を圧しての選出であった。

推薦

ダブルUFO

後藤 俊昭（静岡県裾野市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

目的とする富士山に光はなく、画面全体淡い光のうち、中央部二つの吊し状の雲に朝の赤光があたり、アクセントとなっている。一風変わった作品であるが、こうしたチャンスを的確に捉えて作品に仕上げた技量に敬意を表する。これで下部の雲が少し多すぎるのを半分に切って上部にのばせば、さらに大きな表現となる。題名が富士山主体でなく、雲に当てられているのは少々いただけない。何か別の表題を考えてほしかった。

特選

朝もやに映える 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

朝もや煙る上にすっきりと抜け出た富士山。まさに大月市の風土をみごとに表現してこの上ない。全体のバランスもよく、ことに中景のハーフトーンが実によく、そこだけで風景作品として高度のものといえる。これがあるために作品に遠近感が感じられるのだが、惜しまれるのは左方の霧の調子がいま一歩であり、富士山の雪肌が白すぎて調子、質感の表現が食い足りない。引伸し依頼の際、これらの点をよく説明する必要があるように思える。惜しいところであった。

特選

晩秋の輝き 北沢 清行（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

これまたすばらしい作品で当コンテストの意義である「大月市秀麗富嶽十二景」ということを良く理解した作品である。ことに3番山頂に次いで多い1番山頂・雁ヶ腹摺山からの作品でありながら、従来作品から一步脱却したアングルでの挑戦であり、それをみごと成功させている。富士山の赤熱の輝きはないが、前景の樹肌の輝きが強くアピールしていて、作者もそのことを意図したものと思われる。感服するに値する作品である

特選

光り輝く雲 大戸 康世（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

端正かつ、間然するところのない構成には非の付けようがない。思い切って画面濃度を上げたことも成功のひとつである。そのことによって山稜にわだかまる雲塊の色づきが強調されたといえる。さらに下部が暗黒となったことも富士山の高さをきわ立たせている。ただここで残念なのは題名で、「光り輝く雲」では作品に正当な表現とはいえない。雲の色づきはあるが、光り輝いているのは富士山の方であって雲ではない。一考が欲しい。

入賞

晩秋

渡井 豊（静岡県富士宮市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山からの作品は3点の入賞で、この作品はその3番目にあたる。上位に2点に比して一段下位に置かれたのは富士山が中央にあり、右方がやや多すぎるためである。構成としては前2作が富士を大きく写しこんでいるのに対し、ここでは周囲を多く取り入れている。紅葉も手前に入り、バラエティはある良い作品だが、手前右方の叢林、遠景の雲の右方が多すぎた。カメラポジションをかえ、できたらもっと左方から狙いたかった。

入賞

師走の紅富士 天野 昭吾（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

応募6点、姥子山の富士山中、最も条件に恵まれ、かつ色調良好の作品として選出された。撮影・表現にやや難点のある姥子山からこれだけの作品を作り出すには幾多の困難をクリアしなければならない。その点で作者の努力を多としたい。少々残念なのは、画面中央に山頂が置かれていること、空部がやや多すぎることだが、これは上空の色づいた雲を切り難かったせいだろう。だが、そうしたことに拘泥せず思い切ることが上位への要諦である。

入賞

初秋

天野 昭吾（山梨県大月市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

これまた姥子山同様、アプローチに苦勞する山頂からの作品である。氏は今回、1番から12番まで、18ある山頂の8峰までを出品されているが、1人3点という快挙を成し遂げたのもその苦勞の賜である。この作品はやや濃度とコントラストが強く、そのため樹林のディテールがつぶれ、逆に富士山の雪肌が飛んでしまっている。しかし他の3点の応募作の中では最も上位に値する作品であり、この濃度・コントラストの点が改善されれば、さらに上位に入賞するものと思われる。

入賞

静寂

高橋 利延（神奈川県相模原市）

小金沢山



白簾史朗氏講評

今回、小金沢山からの応募作品は2人、それぞれ1点ずつの応募で、そのうちの1点がこの作品である。応募点数がすくないための入選ではなく、この作品がそれだけ高度のものであったからである。そのことは作者が九鬼山の作品でも入賞し、1人2点の入賞を果たしていることでも、その表現力が非凡であることが知れる。さすが過去、最優秀賞を手にした作家である。この作品は日中、トップライトの悪条件下のものであるが、富士山の雪肌の輝きが生きている。もっとアップにすればさらによくなったろう。

入賞

錦秋の山脈

小林 隆宏（静岡県庵原郡）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

この作品も事務局では大蔵高丸からとなっているが、実際は白谷ノ丸からのものである。「錦秋・・・」は「錦繡・・・」であろうが、こうした場合、形容詞を間違わないで欲しい。山肌の色づきは実にみごとで美しく、まさしく秋まただ中の光景である。しかし、その調子が少にベタついた感じがあつて損をしている。画面下部中央から左方にかけての調子が単調で、富士山の雪肌が飛んでいる。カメラポジションを右方に寄せられたら、と選者の考えである。

入賞

初夏のハマイバ 権正 光夫（山梨県富士吉田市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

これはまたみごとな花叢である。満開のトウゴクミツバツツジを前景とした初夏の富士山、日本の、そして大月の自然はかくも美しいものか、と思わず万人瞠目する光景である。やや富士山が右方に寄りすぎたきらいがあるので、カメラポジションをすこし左方に移動した方がよりスッキリする。それとハマイバの地名は次回から正確に破魔射場と記すようにしたい。地名というものは由緒あるものなので簡略化するのはあまり好ましくない。

入賞

流れる紅雲

天野 昭吾（山梨県大月市）

滝子山



白簾史朗氏講評

小金沢山と並んで最もアプローチに苦しむ滝子山からの富士山である。今回もそのためにただ2点の応募しかなかったため、天野氏に名を成さしめた。富士山にあたった光りが弱すぎ、上空の雲の色づきもあまり上質ではなく、題名とあまりマッチしない。が、これは致し方あるまい。ただ、この作者はどうしても富士山頂を画面の中央部（縦2分しての）に置くくせがある。そのため画面に動きが失われるので注意したい。

入賞

山並はるか 片岡 初枝（静岡県富士市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

この作品は奈良倉山といっても山頂一帯からでなく、相当下部、それも松姫峠への車道あたりからのものと思われるが、長焦点レンズでの切り取りで、画面が省略され、力強さが表現されているため敢えて取り上げた。奈良倉山からの作品は13人23点という多きにわたったが、あまり良好なものがなく、この作品に頼らざるを得なかった。それにしてもアプローチ容易な山では取組みも安易になるためか、そうした山での作品は数があっても良いものが少ない（すべてではないが）のは残念である。

入賞

晩秋の空 山田 岑士（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

この作品も扇山としては山麓に近い地点からのもので、そのため富士山の姿が頂稜部しかのぞいていない。このところ扇山の作品はこうした安易な取り組み方のものが多くなったのは残念である。作品としてはさほど悪いものでなく、一応まとめているがやはり富士山が画面中央に置かれていることで一応安定しているように見えるが作品的に弱くなっている。雲が気になったため、縦での中央だけでなく、上下線でもそれに近くなった。雲を切れればずっと良くなったろう。

入賞

厳寒に染まる 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簞史朗氏講評

百蔵山からのアングルは、中景にどうしても集落が入ってしまうため、あまり感心しない。つまり撮りにくいといえる。その点この作品は暁暗の中にその集落を消す手段である程度成功している。でき得ればさらにアップとして横位置で集落を切り捨てる方がよい。題名についてまたもクレームをつけるが、「厳寒に染まる」では、何に染まるのか不明で、説明不足である。別の形容を考えては・・・と選者がいうのは、作品と題との一致が入賞の一条件だからである。

入賞

朝日をあびて 境 実（神奈川県相模原市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

今回は岩殿山からの作品が2点入賞したが、この作品は奇しくも最優秀賞の作品と同様の構図でもある。撮影日時はこちらの方が一週間あとで、その点富士山についての雪の量のはるかに多い。だが、光のあたりすぎで力強くはあるが幽玄さ神秘さに劣るため、入賞に甘んずることになった。作品には明暗が必要だが、その配分、バランスがあつてこそ上質のものとなる。その点この作品は光の部分が強調されすぎてしまった。

入賞

初冠雪 内藤 元次（山梨県大月市） 高畑山



白簾史朗氏講評

思い切ったアップで初冠雪の富士を捉えている。高畑山の富士山は、手前に鹿留・杓子の二山がきて、あまりよくないものが多く、それに従来は夕景が多かった。この作品はそれらの点を先ず手前の山の山頂を雲がうまくかくしてくれ、さらに朝の時間帯（日中？）に撮影している。上下左右のバランスもよく、いままでの高畑山からの作品では出色のものといえる。時間的にやや調子がベタであるため、澄明さに乏しいところが残念な点である。

入賞

夕日富士 瀬瀬 浩恭 (岐阜県多治見市) 高畑山



白簾史朗氏講評

またまた夕刻の高畑山からの光景であるが、少におもむきが変わっていて、空部が大きくとられている。そのため、せせこましい感じがなくなってひろやかな画面となった。山が低いため、ここの山からの夕景はモヤ全体が色づいていつも赤色系一色になりがちだが、その点もメリハリが利いている。しかし、左手前の樹枝と、かすかだがスキーのストック状のゴーストはいただけない。ファインダーをのぞくときの注意をおろそかにしないこと。

入賞

晩秋の朝 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

まず題名がよくない。「晩秋…」というからには樹々の葉は落ちていなければならない。現実には晩秋の季節であっても、実際の情景がそれを示していなければそういえないものである。その点低山では迷いが出るが、画面にあらわれた情景で判断するようにしたい。構成はしっかりしていて文句はないが、やはり茂みがうるさい。左方と下方を切って単純化したい。現在の倉岳山は手前の樹林を伐り払ったので富士山が大きくひらけて見える。ぜひ再度挑戦してほしい。

入賞

黎明

高橋 利延（神奈川県相模原市）

九鬼山



白簾史朗氏講評

大きく真正面に赤く焼けた富士山、堂々として力強い。このくらいアップとなると画面の左右中心線に山頂を持ってきてもおかしくない。動きはなくなるが、重量感・安定感がそれにとって代る。この作品はやや少し下方に山頂を下げ、下部の黒部を減らすと窮屈さがなくなる。九鬼山の山頂は植林したヒノキの丈がのび、非常に撮影しにくくなっているため、こうしたアップもひとつの手法として考えたい。当局としても何らかの手を打つことを考えている。

入賞  
春雪

八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 高川山



白簾史朗氏講評

少しカメラポジションを左方に移せなかったろうか、と思うが、あのせまい高川山の山頂では無理かもしれない。というのは右方の茂みより、左方の樹の方が前景としてすぐれているからである。それともこの作品は山頂でなく、どこか他の場所からなのか？ 全体として見て、手前の樹林の光はよいが、富士山にもう少し光がほしい。それと右方と下方を少し切って構図をととのえたい。それと題名に一工夫、実際は春でもこれは厳冬の情景で、春の雪の名にそぐわない。

入賞

秀峰高く

小谷 哲朗（三重県松阪市）

本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

本社ヶ丸からの作品は3点あったが、その中ではこの作品が第一であった。この山は手前の尾根によって構成が限定されるので撮りにくい山のひとつであるが、この作品は手前の尾根と富士山の右スカイラインをともに右下に流す構成法をとり、それがある程度成功している。でき得れば横位置構成とした方が上部と下部が切れて大きく安定する。このままだとすると上部が少し、下部はそれ以上に無駄なスペース配分となり、画面が暗くなっている。

入賞

ツツジ咲く 宮地 広之（東京都世田谷区） 清八山



白簾史朗氏講評

色とりどりでカラフルのため一般的に人気の出そうな作品である。この作品でも考えたいのはカメラポジションをもっと左方に寄せたい、ということである。場所の条件はどうだったか、それが問題だが、そうすると全体に花叢が右に寄って左方の三つ峠山頂と、右方の松が画面から外れる。そうすると非常にスッキリした画面となろう。空部の雲が気になって切りきれなかったようだが、これももっと切って富士山の高さを表現したい。

## 総評

審査員長 白籟史朗

第10回という大きな節目が過ぎて、その後の第1回としての今回のコンテストであった。

まず応募者総数58名、応募作品数は206点である。応募者中初めて応募した人は20名、第10回の応募者数44名、応募作品数196点、新規応募者数8名に比較すると作品数はともあれ、大きな飛躍といえる。大月市内でみると応募者13名で1名増、応募点数67点で4点減、新規応募者2名、0の前回より2名増ということになる。

山梨県内では9名で1名増、点数は20点で6点減、新規応募0で2名減。だが県外では36名応募で12名増、119点で10点増、新規応募者18名で12名増となる。これによって、さらにこのコンテストが県外に知られてきたかの実証となろう。

応募作品数206点の内訳は1番山頂の雁ヶ腹摺山が26点、姥子山が6点、2番山頂の牛奥ノ雁ヶ腹摺山と小金沢が4点と2点、3番山頂・大蔵高丸と破魔射場は47点と3点、4番山頂・滝子山と笹子雁ヶ腹摺山は2点と0点でもっとも少なかった。5番山頂の奈良倉山が23点、6番山頂・扇山も23点、7番山頂百蔵山は13点、8番山頂岩殿山が16点、9番山頂高畑山と倉岳山は9点と3点、10番山頂九鬼山が8点、11番山頂高川山も8点、12番山頂本社ヶ丸と清八山は3点と8点ということであった。

こうしてみると、もっとも多かったのが大蔵高丸で、次いで雁ヶ腹摺山の26点、さらに奈良倉山と扇山が23点でこれにつづく。他には9点が1山、8点が3山、6点と4点が各1山、3点が3山、2点が3山というように少数となってくる。1点もなかったのは笹子雁ヶ腹摺山で、これは恒常的となってきた。少数の登りやすく撮りやすい山に行くのは人情的に致し方ないが、当局としてはできる限り平均的に作品を寄せて欲しい。そのむね、お願いしておきたい。

全体の、そして入賞者のレベルは本年もアップしているといつてよく、この点では心強いかぎりである。だがまだ、1人1賞の建前が崩れ、今回も3点入賞が1人、2点入賞が2人ということになったのは、前述の応募作品数の片寄りと作品の質からである。また反面、地元大月市からの応募が最優秀賞をはじめとする上位6点中を4名が占めていること、入賞者中にも6人がいることは喜ばしい。いずれにしても、この第11回は新しいスタートであったが、次回からはさらに高度の作品に挑戦し、応募して下さることを願うや切である。その点、今回は新人の入賞もあり、今後が大いにたのしみである。さらに入賞の項に1～18のNo.

がついているが、これは順位に関係なく、1～12の山頂順によるものと理解していただきたい。